

# 子どもの世界も尊重

山下律子さん  
大野新田(33歳)



小学校4年、3年、幼稚園児と3人の子がいる我が家では、やはり下の子が一番物を欲しがります。しかし、幼児期のうちはある程度やむを得ない事だと思っています。上の子どもたちを見てきた経験では子どもは子どものつきあいもあり、余り制約するのも考えものだと思います。また、成長するに従い家庭の状況もわかるようになり、いたずら

に物を欲しがるといふこともなくなります。何でもすぐに買い与える事は良くありませんが、子どもは徐々に成長していきます。物の買い与え方も不必要に神経を使うより、時には子どもたちの世界を尊重し、見まもってやることも大切だと思います。



池田さん親子

んだよ」と得意そうに話してくれました。それを聞き、思わずハッとしました。おもちゃ、学用品、生活用品とお金さえ出せば何でも手に入る社会で、工夫して自分でつくる、ということを知った喜び、すばらしいと思います。そして、本当に必要なものは何か、を見きわめる目を持つことの大切さ、又それを子どもたちに教えていけたらと思いました。こう思いながらも、おもちゃはクリスマスの時と決めている我が家のおもちゃ箱が、いつの間にかふえているのに気づき反省する事しきりです。

# 自分で作る喜びを

池田洋子さん  
駿河台3(33歳)

少し前のことです。6歳になる長女に、色数の多いクレヨンが欲しいとねだられました。その時は、「そんなにたくさん色いらないでしょ」と答えましたが、先日一緒にお風呂に入った時、「お母さん、みどり色の上に薄く黒をぬって、又みどり色をぬるとふかみどりになるんだよ、〇〇ちゃんは持っているけど私はつくる

「市民文芸第二十号」の詩の部でみごと市民文芸賞に輝いた釘谷さん。  
釘谷さんは、今までも小説・随筆・川柳などあらゆる部門の賞を総なめ、物を書きはじめて五十年という釘谷さんにお話を伺いました。  
文学についての考えは——  
長い間書いていますが、今もってわからないのが文学。



市民文芸賞(詩の部)を受賞。富士市の文芸活動のない手として活躍

くぎやよしお  
釘谷芳男さん  
大淵城山(70歳)

今の文化は、教養ごっこという感じがします。地道に活動している者にとつては少しさびしいですね。しかし、大きな意味での文化としてはいいのかもしれない。と物静かな口調で語る釘谷さん。  
鷹岡生まれで城山に移り住んで十五年。食品店を営む奥さんと二人暮らし。文学をこよなく愛する人でした。

文学とは何か、いかにあるべきかを考えはじめたら何も書けなくなります。ただ自分の思うままを、素直に書いていくだけです。最近、よく文化文化と言われていますが、